武蔵国分寺遺跡発掘調査概報

Ⅱ

恋ケ窪堂址第二次調査

1976年7月

国分寺市教育委員会
武蔵国分寺遺跡調査会

序

恋ケ窪堂址は、武蔵国分寺研究の一環として重要な意義をもっている。かつて国分寺中心地域を指定史跡とする前後、この地から国分寺と同種の遺瓦を多く出土し、併せて板碑の遺存することが知られていた。しかし、その性格の究明は行なわれないまま林として最近まで残されていた。

しかし、武蔵野西線の建設予定が話題になるころから、この地の調査の必要なことが現実のこととして論じられた。そうした間に突然遺跡地にブルがはいり、プレハブが建てられた。それを契機に北側部分の緊急調査が行なわれ、堂址として確認されるに至った。幸いこの地は、駅前広場の一角として残存することになったが、今回、建物の一部撤去に伴い、第二次調査を実施し、建造物址3棟分を検出することができ、いよいよその重要性が認識されるに至った。

今後、プレハブ撤収により第三次調査を予定するが、上代中世を通じてのこの地に営まれた堂址の性格の明らかになることにより、研究上からも文化財としてもいっそう貴重なものとして認識されるものと考える。

本書刊行に当り、関係各位に対し深謝するものである。

昭和51年6月

滝口　宏

例　　言

1. この概報は国分寺市が武蔵国分寺遺跡調査会に委託して、昭和５１年４月１６日～７月７日まで実施した恋ケ窪堂址第二次調査の概略を収録し、武蔵国分寺遺跡発掘調査概報Ⅱとして発行するものである。

2. 恋ケ窪堂址は昭和４６年９月に国分寺市が泉町廃寺址遺跡調査会に委託して調査を実施し、報告書が出版されている。（恋ケ窪堂址調査報告、東京都国分寺市・泉町廃寺遺跡調査会）。

   今回の調査はこれを継承して、第二次調査とした。

3. この調査は武蔵国分寺寺域確認調査の一環として実施し、経費は国庫補助によるものである。

4. 調査にあたっては、文化庁、東京都ならびに地主の西中伝次郎氏および、㈱一水園の協力を得たことを記して、深謝したい。

5. 調査は、担当者である滝口宏の指示にもとずき、永峯光一・大川　清・坂詰秀一の指導のもとに、主として早川　泉、西脇俊郎、一山　典があたった。

6. 調査の地区割は、武蔵国分僧寺堂宇の中軸線によった。

7. 本書の執筆は、滝口宏を中心に、調査団の共同討議、検討の上で調査員が各項目別に担当し、その文責を文末に記した。

8. 陶器については、国学院大学考古学資料室学芸員金子皓彦氏の指導を得た。

9. 調査にあたり、下記の諸氏より助言・協力を得た、記して感謝したい。

   安孫子昭二・伊藤玄三・岡崎完樹・蟹江康子・亀田駿一・川崎義雄・古泉弘・小林重義・芹沢広衛・千田　潤・戸田有二・滑川二三郎・福田健司・堀内健一郎・本多章吉・山口辰一・雪田　孝・雪田隆子

10. 武蔵国分寺遺跡調査会組織

構成員名簿

会長	塩谷信雄	国分寺市長
副会長	滝口宏	東京都文化財専門委員
	笠原真作	国分寺市教育委員会委員長（前任）
	森田茂	〃 〃 （後任）
	佐藤敏也	国分寺市文化財保護審議会委員長
	西川進	東京都教育庁社会教育部主幹（退任）
理事	永峯光一	東京都文化財専門委員
	大川清	国士館大学助教授
	坂詰秀一	立正大学助教授
	四方田和彦	東京都教育庁文化課長（前任）
	森本洋次	〃 （後任）
	渡辺保一	国分寺市教育委員会教育長
	坂本喜市	国分寺市社会教育委員会議々長
	和気孝衛	国分寺市社会教育委員会議副議長
	星野亮勝	国分寺市文化財保護審議会委員
	松井新一	〃
	宇野信四郎	〃
	藤間恭助	〃
監事	浅見正平	国分寺市社会教育委員
	曽根寛	東京都教育庁文化財管理係長
事務局長	関口雄基臣	国分寺市教育委員会次長（前任）
	進藤文夫	〃 （後任）
事務局長補佐	中村万之助	東京都教育庁埋蔵文化財係長
	山下実	国分寺市教育委員会文化財担当主幹
事務局員	五十嵐博	国分寺市教育委員会社会教育課係長（前任）
	鍾見宏	国分寺市教育委員会社会教育課員（前任）
	下薗春夫	〃 （後任）

調査団

団長	滝口宏	東京都文化財専門委員
副団長	永峯光一	〃
	大川清	国士館大学助教授
	坂詰秀一	立正大学助教授
調査員	早川泉	東京都教育庁文化課学芸員
	西脇俊郎	〃
	有吉重蔵	国分寺市教育委員会社会教育課員
	福田信夫	〃
	一山典	国学院大学大学院博士課程
	池上悟	立正大学大学院修士課程
	雪田孝	元東京都教育庁文化課学芸員（退任）

（昭和51年6月30日　現在）

目　　次

1. 調査経過 …… 5
2. 地理的環境 …… 6
3. 層　　序 …… 7
4. 発見遺構 …… 8
5. 出土遺物 …… 11
6. 総　　括 …… 15

図面目次

第1図　恋ケ窪堂址と周辺遺跡
第2図　遺構全体図

図版目次

図版1　遺跡全景
2　発掘スナップ
3　SB1建物跡
4　SB3建物跡・SB2建物跡
5　層序・SD1溝跡
6　皇宋通寶・熙寧元寶・永楽通寶
7　朝鮮通寶・仏華瓶・陶器類
8　軒丸瓦
9　軒丸瓦・軒平瓦・文字瓦
10　文字瓦・人名瓦
11　文字瓦・熨斗瓦
12　宝篋印塔・板碑

1. 調 査 経 過

遺跡地内がブルドーザーによる整地工事が行なわれている旨、市教育委員会に連絡が入ったのは３月２４日であった。

ただちに工事を中断していただくと共に、地主[redacted]氏と遺跡の保存と発掘調査について協議を重ね、快諾を得たので、４月１６日調査に着手した。

調査は、４６年度調査地区の再発掘も含め、全面調査とし、３ｍ方眼の調査区を設定した。

４月２０日、武蔵野西線側から表土排土に取り掛ったが、砂利混りの盛土が厚く堆積し、困難を極めた。また、多量に出る土砂の置き場を調査地区内で処理しなければならず、調査の進行を著しく妨げた。

翌２１日、西北隅で南北に延びる溝跡を確認し、ＳＤ１溝跡と名付けた。その他、数個のピット、土坑等が検出された。

調査員・考古学専攻学生６名で始めた調査も、５月２日、新たに１２名の作業員の参加を得て急速に進展し、府中街道側からの表土排土作業も開始した。

この地区は、特に東北隅において攪乱が激しく、ローム上面まで、重機による爪跡が残されていて遺構検出は不可能であったが、その南側から東西２間・南北３間及び東西１間・南北３間の掘立柱建物跡が２棟検出された。その間、板碑・宝篋印塔・皇宋通寶等の出土があり、多いに気を良くした。写真・実測後ただちに埋戻し、５月１３日、遺跡中心地域の調査に入った。

この地域は、４６年度調査時に礎石を持つ建物跡が確認された南側地域と、攪乱が激しく調査されなかった北側地域にあたる。

まず、南側地域を旧調査面まで掘り下げ、礎石の配置、根石の状態を確認し

ながら、北側地域の排土作業を平行して進めた。

その結果、予想通り北側地域は大半が攪乱されていたが、遺構面は一部を除いて健在であった。

6月9日、遺構検出作業の結果、四面廂の掘立柱建物跡が検出されたので、SB2建物跡と名付けた。掘り方が小さく、柱跡を確認できたものは少ないが東西3間、南北4間の身舎に1間の廂が付くことがわかった。

写真撮影・実測が6月15日で完了したので、翌日その地域をブルドーザーで埋戻し、全力を礎石を持つ建物跡の精査にふりむけ、作業の人員も厳選し少数精鋭で挑んだが、新たな成果を得ることはできず、7月1日・写真撮影及び平面図完成後、根石と思われる瓦礫の集中している部分の最終的確認を行ない、7月7日すべての調査を終了し、埋戻しを行なった。　　（早川　泉）

2. 地理的環境

国分寺市は奥多摩に端を発する多摩川と秩父に端を発する荒川によって挟まれた武蔵野台地の西南に位置し、市域は標高約70～80mの武蔵野段丘と、より低位の標高約60～70mの立川段丘にまたがっている。この武蔵野段丘と立川段丘を画する崖線は通常国分寺崖線とよばれ、高さ約10～20mの崖である。この国分寺崖線の直下には旧多摩川の名残川と考えられる野川の流れがある。崖線の武蔵野礫層から湧きだす湧水を集めて流れる河川であり、国分寺市恋ケ窪に源を発する。

恋ケ窪附近は野川の源流となる豊富な湧水にめぐまれ、古くよりこの湧水を廻って集落が営まれている。先土器時代の熊ノ郷遺跡、縄文時代中期の大規模

な集落である恋ケ窪遺跡が代表的なものであり、新しくは鎌倉街道が通り宿場がおかれたという。

恋ケ窪堂址は、東京都国分寺市泉町三丁目３３外に所在する。縄文時代中期の恋ケ窪遺跡と谷を挟んで対岸にあり、武蔵国分僧寺の北西約１Kmにあたる。旧鎌倉街道の東に接し（現在、府中街道。一部に旧道の名残りをとどめる。）、現在、北を国鉄中央線、西を武蔵野西線が走り、西国分寺駅の南約９０ｍに山林がある。

この地に布目瓦、板碑が出土し、礎石が遺存していたことは早くから知られており、昭和４６年には本格的な調査が行なわれ、古代より中世にかけての堂址の存在が明らかとなり、その性格をきわめることは武蔵国の古代から中世への歴史的推移を知る上で数少ない貴重な資料を提供するものであり、また国分寺市の歴史を明らかにする上でも重要な位置を占めるものと考えられる。

（西脇俊郎）

3. 層　序　（図版５－１）

遺跡周辺はＳＢ１礎石建物附近、および西側の地域を除いてほとんど後世の攪乱によりローム上面まで削平されていた。比較的残りのよい西側での基本層序は以下の通りである。なお一部に盛土が認められたが、ここでは省略してある。

第Ⅰ層　表土

第Ⅱ層　黒褐色土　大部分は木の根による攪乱をかなり受けており、Ⅲ層の

褐色土が小ブロック状に入る。粒子は全体に均一でややザラザラしている。第Ⅲ層との境は不明瞭で漸移的である。少量の瓦、縄文土器を含む。

第Ⅲ層　黄褐色土　ローム漸移層。粘性つよく固くしまる。遺構のほとんどはこの面より検出した。

第Ⅳ層　ローム層　いわゆる立川ロームである。　（西脇俊郎）

4. 発見遺構

ＳＢ１建物跡（図版３）

前回の調査で認められた土壇と思われるものの上には、旧礎と考えられるものが６個存在し、他に若干の小片の石が発見されている（第２図）。

１は長径約７０㎝、短径約６０㎝、高さ約４０㎝で、上面がほぼ平らな石で、前回の調査時の位置より、更に南東に３ｍ程度移動していた。

２は直径８０㎝程度の丸石で、下底には瓦片が若干残存している。松の根等のために移動したのか南側に傾斜している。

３は長径約１１０㎝、短径約５０㎝でほぼ水平に位置している。欠損した破片が近くに存在するが若干移動している。根固めのための小石、瓦片等が認められるがしっかりせず、移動している可能性が大である。

４は長径約８５㎝、短径約６５㎝でほぼ水平に位置し、下底には小石、瓦片が多量に、根固めのために詰められたごとく入っていた。残存礎石の中では移動している可能性の薄いものであるが、前回の調査時には離れた位置にあった

と思われる石が北側の下底付近に認められるので検討の余地がある。

5は長径約115㎝、短径約90㎝の楕円形の石で南に傾斜している。南東部に根固めに使用したと思われる小石、瓦片が集中して出土しており、この部分から移動したものであろう。

6は長径約65㎝、短径約50㎝の欠損している丸石で移動が明確である。

以上の他にも石の破片が点々と認められ、安定したものとは断定できないが、礎石の原位置を推定するための資料となっている。なお、4と5の間にも前回の調査では礎石と思われるものが存在したが、現在はなくなってしまって、掘り方を残すのみとなっている。6の南東約2mの位置にも集石が認められるが、中心がプレハブの下に入っているので今後の調査がまたれる。

旧礎と思われるもの及びそれに関連する石片の存在区域は周辺のローム面より20～40㎝高くなっている。前回の調査で認められた約20㎝の表土は大部分排土されていた。表土下に認められた粘土敷もほとんど痕跡を残す程度で範囲も限定されている（第2図A）。次に30～35㎝の黒色土、15㎝程度のローム漸移層が続き、ローム面に至っている。

土壇と思われるものは北側では攪乱が顕著なため、その限界をつかむことができない。西側の部分は、新しい溝跡あるいは土坑状遺構等による攪乱のためか、土壇の立ち上り部が不明瞭となっている。東側も、SB3・SB4の建物跡等の構築時に削平されたためか不明瞭となっている。

一般的に基壇に実施される掘り込み地業の痕跡も不明確であり、版築と断定できるものも今回の調査では未検出である。又、礎石の移動が顕著なため、柱礎の位置から建物を想定するには至らず、礎石配置の重複等も明確ではなかった。南側の部分の調査成果をまって検討を加えてみたい。　　（一山　典）

ＳＢ２建物跡（図版４－２）

ＳＢ１建物跡のすぐ北に隣接した四面廂の掘立柱建物である。東西４間×南北５間の南北棟であり、床張りの建物と考えられる。間尺は東西が約1.２＋2.0＋2.0＋1.２m、南北は約1.２＋2.0＋2.0＋2.0＋1.２mである。ＳＢ２建物跡は磁北に対し約２０度東へふれている。

ＳＢ３建物跡（図版４－１）

ＳＢ２建物跡の東にあり、建物の方向はＳＢ２建物跡と一致する。東西２間×南北３間の南北の掘立柱建物である。間尺は東西約1.７＋1.５m、南北約1.5＋2.0＋1.５mである。北西の隅の柱より皇宋通寶が１点出土している。

ＳＢ４建物跡

ＳＢ３建物跡の後で建てられた東西３間×南北１間の東西に長い掘立柱建物である。ＳＢ２，３建物跡と方向がずれており、時期が異なると考えられる。間尺は東西約1.８m等間、南北約3.７mである。磁北とのずれは約１０度である。

ＳＤ１溝跡（図版５－２）

発掘区の北西、ＳＢ２建物跡より約１２m西で検出した溝である。溝の南はすでに武蔵野西線の工事の際に削られ、北は隣接する畑地に延びており、全体を明らかにすることができなかった。巾約0.８～１m、深さ約２０㎝の「⌒」形を呈する溝である。北でやや東に偏し、ＳＢ２，３建物跡と方向が一致する。この溝跡は、恋ケ窪堂址を区画した溝の可能性がある。

掘立柱建物について

先にも述べたように、ＳＢ２、ＳＢ３の各建物跡と、ＳＤ１溝跡の方向は、いずれも磁北に対し約２０度東にふれている。このことは３者が同一時期に属しているものと考えられる。おそらく、建物の規模から考えてＳＢ２が中心的な建物であろう。ＳＢ４建物跡は、ＳＢ３建物跡との切り合い関係から、ＳＢ３建物跡よりも新しい時期の建物であり、しかも建物の磁北に対するふれは約１０度となり、やや方向も異なっている。

また、現在の府中街道はほぼ旧鎌倉街道に沿っており、遺跡附近では一部旧道が残っている。その方向をみると、やはり磁北に対し、やや東にふれ、北に向って旧恋ケ窪村へ通ずる。

従って今回検出したＳＢ２，３建物跡とＳＤ１溝跡の方向と、旧鎌倉街道の方向がほぼ一致することが判り、これは恋ケ窪堂址の性格を究明する上での重要な示唆を与えるものである。（西脇俊郎）

5. 出 土 遺 物

土器（図版７－２，３）

ほとんどが小破片である。赤褐色を呈する回転糸切り底の坏、および須恵器甕が出土している。

また、赤褐色を呈する常滑系の陶器（甕、鉢）の破片も若干出土し（図版７－３）、図版７－２に示す表面に淡い緑色の釉のかかった古瀬戸の仏華瓶（底部回転糸切り）も出土している。

板碑（図版１２－２）

ほとんどが、破片であるが、図版１２－２に示したものは種子の読める唯一のものである。表面は平滑で浅い二条線が頂部にみられ、更に二条線上の上下と両側線に細い枠線がある。種子は阿弥陀で蓮台を有する。緑泥片岩製。

宝篋印塔（図版１２－１）

凝灰岩製の相輪の一部である。かなり風化しており、九輪は細い刻線によって表わされている。　（西脇俊郎）

瓦類（図版８～１１）

調査の結果、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、文字瓦等が出土した。

軒丸瓦（図版８・図版９－１・２）

(1)　６葉の単弁蓮華文で花弁は輪郭線を有し、弁端は尖形を呈する。中房径は4.7㎝で蓮子は１＋４と推定されるが剝落のため不明。暗灰色を呈し、胎土は微砂粒を多量に含み、焼成は比較的良好である。瓦当面に范割れの痕跡が顕著である。（図版８－１）

(2)　６葉の単弁蓮華文で花弁は輪郭線を有し、弁端は尖形を呈する。中房径は3.6㎝で蓮子は１＋４で全体的に薄手な作りである。暗灰色を呈し、胎土には砂粒を若干含み、焼成は良好。瓦当面には自然釉が認められる。（図版９－１）

(3)　６葉の単弁蓮華文で、前二者に比して弁端が丸味を帯びている。淡赤褐色で、胎土は砂粒を多量に含み、焼成は普通である。全体的に薄手な作りである。（図版９－２）

(4)　７葉の単弁蓮華文で花弁は厚肉で弁端は尖形を呈する。中房は太くて粗雑な圏線で中央に大粒な蓮子一個を配している。暗灰色を呈し、胎土は比較的

多量の砂粒を含み、焼成は良好である。全体的に薄手で粗雑な仕上りである。（図版８－２）

軒平瓦（図版９－３）

(1) 棒状工具による刺突文を二列交互に並列したもので、篦によって内区を表現している。顎部は所謂蹄顎（ていがく）形式に近く、全面に縄目文が施されている。暗灰色で、胎土には粗砂粒を多量に含み、焼成は比較的良好である。

なお、四重弧文、均整唐草文を有する軒平瓦も出土しているが、今後の調査の関連より取り上げていないので詳細は後日にまちたい。

丸瓦・平瓦

丸瓦は外面（凸面）に篦削りが施され、内面（凹面）は精粗のある布目痕を有し、全体に輪積痕が認められるものが多い。平瓦には内面（凸面）に正方形格子目文、長方形格子目文、斜格子目文、縄目文等の叩目文が施され、外面（凹面）は糸目の通るものと通らない布目痕があり、精粗が存在する。量的には縄目文のものが多く認められた。

文字瓦（図版９－４，図版１０・１１）

(1) 豊　平瓦の外面に陰刻されたものである。内面は幅が狭く須恵器の叩目文に似た平行線文が施され、外面はやや粗雑な布目痕を有する。豊嶋郡の郡名瓦である。（図版１１－１）

(2) 刑部直賢万呂　外面は篦削り、内面は布目痕を有する丸瓦で、内面の布目痕を幅５cmで篦削りし、そこに六文字が篦書されている。刑の上半部は欠損している。この人名瓦は武蔵国分寺に関連するものとしては初見である。（図版１０－２）

(3) 平瓦の外面に篦書文字の一部が認められるものである。（図版９－４）

(4) 平瓦の外面に篦書文字（三あるいは川か）が認められるものである。（図版１０－１）

(5) 外面は斜格子目文、内面は糸目の通らない布目痕を有する熨斗瓦で、内面には粘土板製作時の糸切痕が顕著である。外面に表面が削平され不明瞭ではあるが、荏原郡瓦を示す型押の「荏」の字が認められる。（図版１１－２）

以上、出土の瓦類について略述してみた。全体的に出土点数も少なく、堂址に明確に伴なうものも多くはないが、いずれも武蔵国分寺と密接な関連を有する瓦である点は首肯される。

古銭（図版６・図版７－１）

出土の古銭は５枚である。古銭の分類には同一銭種名のものを書体、縁、背文別等によって細分することもできるが、出土点数も少ないので、銭種名別の大分類にとどめた。

(1) 皇宋通寶　初鋳が１０３９年の北宋銭で、真・篆書の二種類が存在する。真書のもの（図版６－１）はＳＢ３建物跡の柱穴より出土しており、この建物跡の年代考定に示唆を与えている。

(2) 熙寧元寶　初鋳が１０６８年の北宋銭で、篆書のものが出土している。（図版６－３）

(3) 永楽通寶　初鋳が１４１１年の明銭で、今回の出土銭の中では最良の残存状態を示している。（図版６－４）

(4) 朝鮮通寶　初鋳が１４２３年の李朝銭で、真書のものである。（図版７－１）

（一山　典）

6. 総　　括

今回、再発掘を行なった礎石をもつ建物跡は、北側地域との関連をみるためと、あわせて不明確であった建物跡の規模と方向を確定するところに、その目的があったが、何ら新しい知見を得ることはできなかった。

しかし、北側地域から新たに検出された３棟の掘立柱建物跡と１条の溝は、恋ケ窪堂址の全体像を考える上に、極めて重要な発見となった。

前回の調査で堂址の創建時期を奈良末期から平安初期に、廃絶の時期を鎌倉時代前後に出土瓦等によって想定されたが、[註1]　今回新たに検出された掘立柱建物跡は、その後の恋ケ窪堂址の変遷を示すものと考えられる。

１４・１５世紀の紀年銘のある板碑[註2]　古瀬戸等の中世陶器、熙寧元寶（１０６８年）・朝鮮通寶（１４２３年）等の古銭類の出土は、平安以後の堂址の変遷を物語るものであり、ＳＢ３建物跡の柱穴から出土した皇宋通寶（１０３９年）は建物跡の上限年代を規定することができる。

また、斉藤鶴磯の『武蔵野話』、あるいは、『新編武蔵風土記稿』、『江戸名所図会』等、江戸後期の地誌類の中に、恋ケ窪村の南境、鎌倉街道附近に、かつて寺院が存在したが、今はその場所も定かではなく、また、この街道脇から時々布目ある古瓦や古碑などが掘り出されることがある等の記事が見うけられるので、中世あるいは近世初頭に寺院の存在したことが文献からもうかがえる。

しかし現段階では調査面積も狭く出土資料も少ないので、今後、遺跡南側及び北側など周辺地域の調査の進展をまって、結論付けたいと思っている。

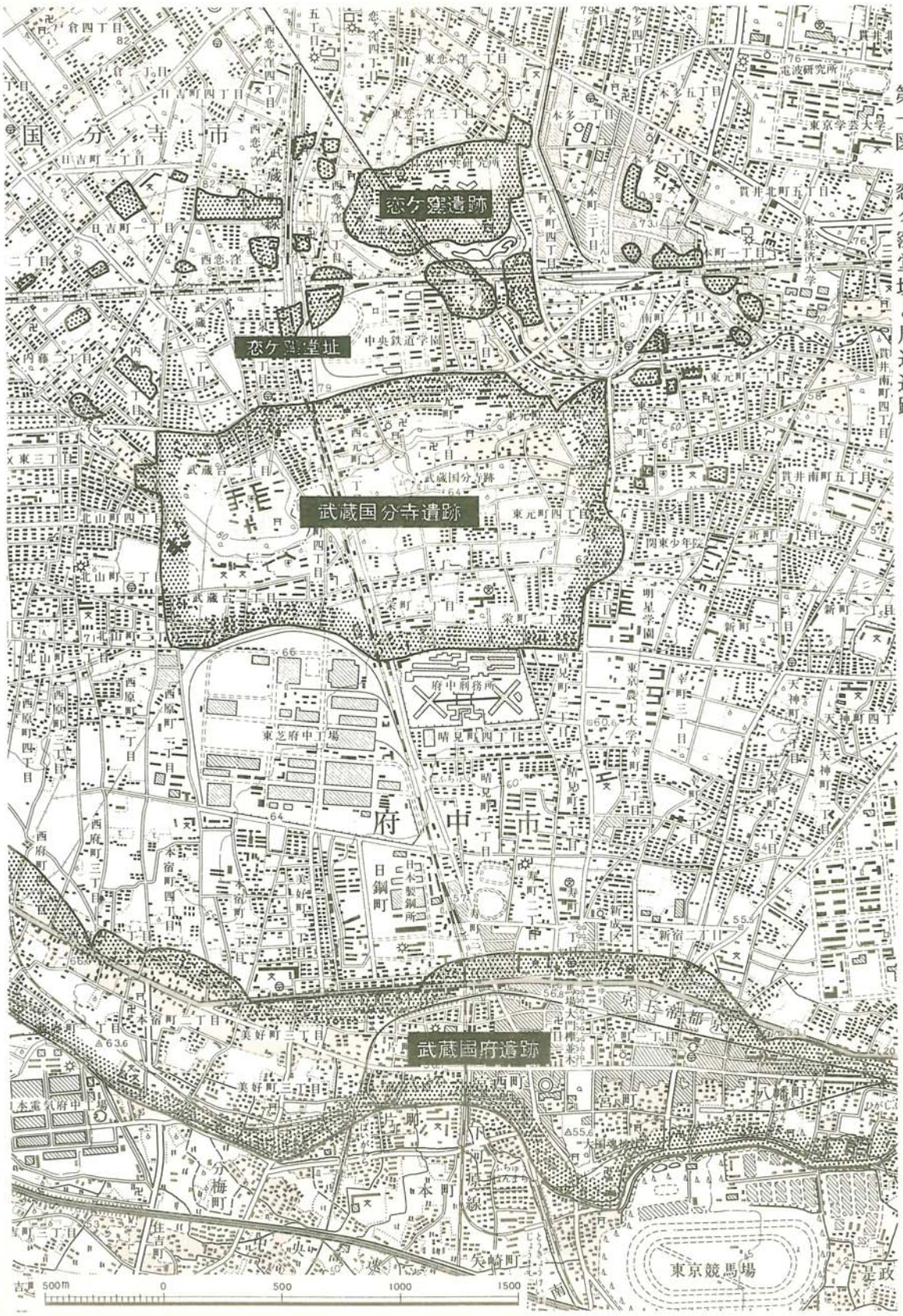
註１　滝口宏他「恋ケ窪堂址調査報告」１９７２

註２　第１調査及び本多章吉氏所蔵の板碑には、嘉暦３年（１３２８年）から明応４年（１４９５年）の紀年銘がある。

追　記

７月２日、ＳＢ１建物跡の最終的精査の過程で、ＳＫ３・４土坑を掘り下げたところ開元通寶（６２１年）・天禧（てんき）通寶（１０１７年）・皇宋通寶（１０３９年）・洪武通寶（１３６８年）等がＳＫ３で１１枚、ＳＫ４で３枚重なりあって、歯・骨片などと共に出土し、この土坑が１４世紀以後の墳墓であることが明らかになった。しかも、この土坑墓がＳＢ１建物跡の土壇を掘抜いている。このことはＳＢ１建物跡が、この時期には完全に廃絶されたことを示すものであると考えられる。

（早川　泉）



第一図　恋ケ窪堂址と周辺遺跡

第二図　遺構全体図

府中街道

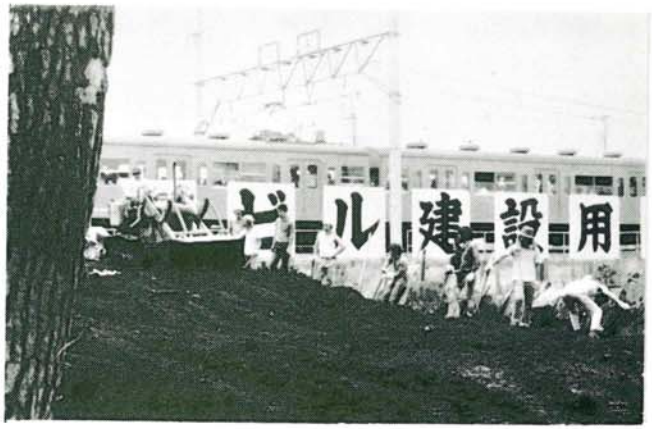
1.　遺跡全景　北から

2.　遺跡全景　東から

1. 発掘スナップ（表土排土）

2. 発掘スナップ（遺構検出）

3. 発掘スナップ（図面作成・精査）



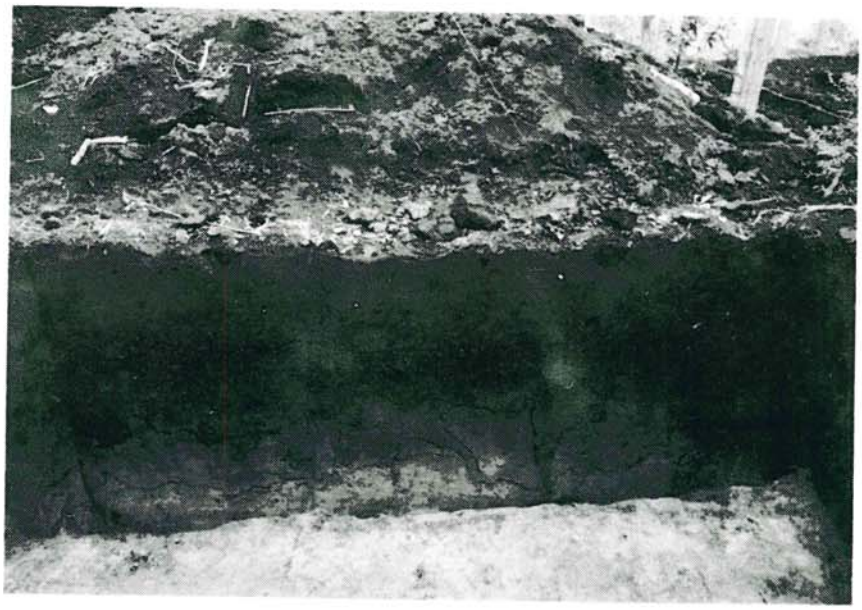
4. 発掘スナップ（埋戻し）

1.　ＳＢ１建物跡　北東から

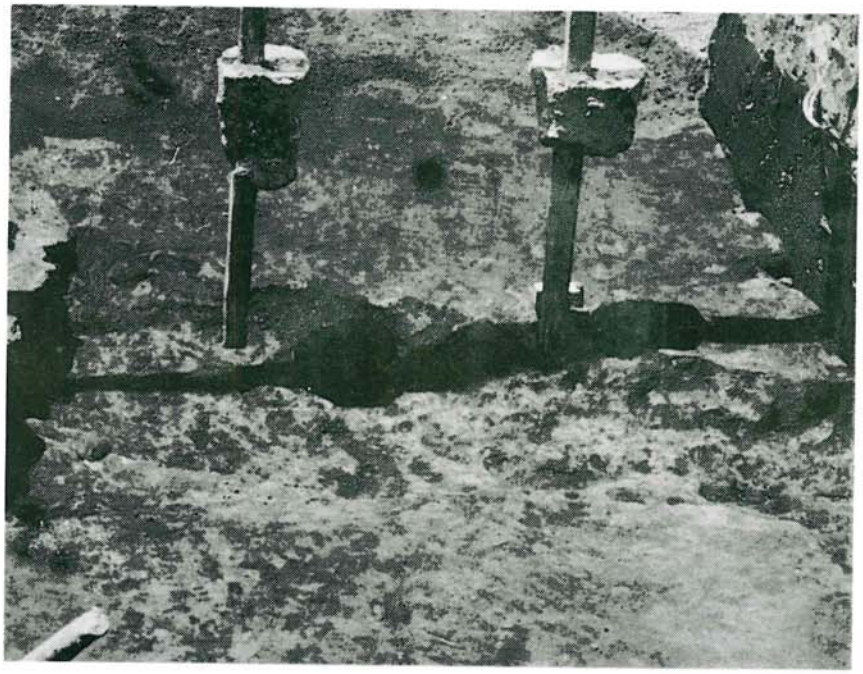
2.　ＳＢ１建物跡　北から

1.　ＳＢ３建物跡　北から

2.　ＳＢ２建物跡　南から



1. 層序　ＮＩ１２４区 西壁



2. ＳＤ１溝跡　東から

1. 皇宋通寶

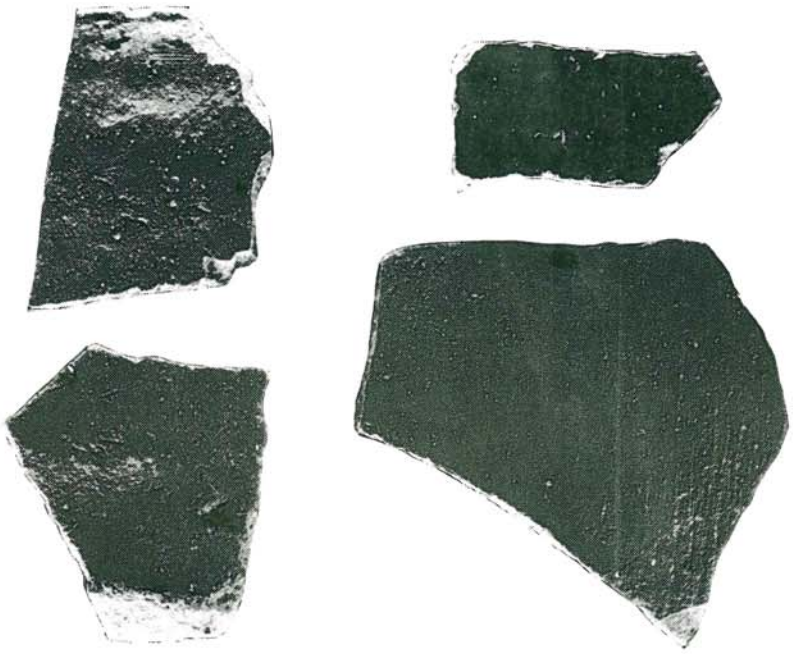
2. 皇宋通寶

3. 熙寧元寶

4. 永楽通寶

1. 朝鮮通寶

2. 仏華瓶



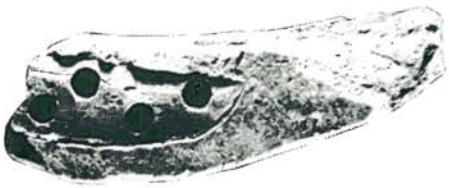
3. 陶器類

1.　軒丸瓦（鐙瓦）

2.　軒丸瓦（鐙瓦）

1. 軒丸瓦（鐙瓦）

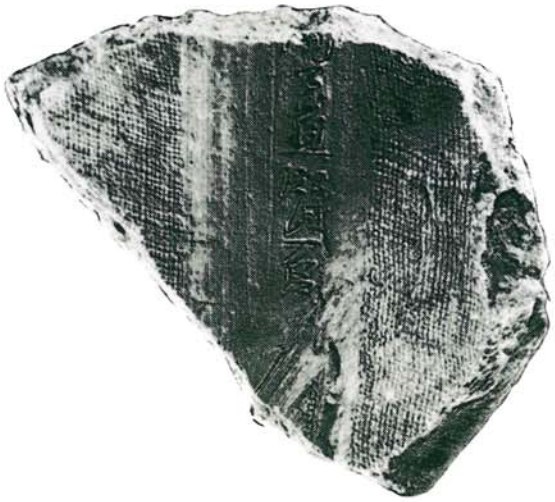
2. 軒丸瓦（鐙瓦）



3. 軒平瓦（字瓦）

4. 文字瓦（丶）

1.　文字瓦（三？）



2.　人名瓦（刑部直賢万呂）

1. 文字瓦（畫）

2. 熨斗瓦（荏の字あり）

1. 宝篋印塔相輪部

2. 板　碑

発掘調査参加者：

金子正典	上村昌男	小日向　正
西谷栄治	浦辻栄治	桐生直彦
剣持和夫	柳浦俊一	

（国学院大学　考古学専攻学生）

内山恵子	加藤敏彦	迫村若恵
杉山是清	高田敏秋	西岡奈穂子
萩田順信	平塚千恵子	

（武蔵野美術大学　考古学研究会）

大越　翼	広瀬雄一	

（学習院大学　史学科学生）

伊藤聖樹	片山康昭	加藤木久雄
唐木英一	岸本　章	小堺俊一
桜井延一	白岩一樹	杉原真嗣
鈴木　聡	鈴木立実	高尾忠伸
中間千廣	西村　保	備瀬健二
牧野達也	又木　進	南川交伸
本橋義之	山本　晃	渡辺　智

昭和５１年７月１４日発行

武蔵国分寺遺跡発掘調査概報　Ⅱ

恋ケ窪堂址第２次調査

編　集　武蔵国分寺遺跡調査会

発　行　国分寺市　教育委員会
国分寺市戸倉１－６－１（〒185）

令和３年（2021）９月９日　デジタル版作成

底本はＢ５版。

図版は片面印刷のため、裏面の空白頁を省略した。